

ちから スポーツの力 ～する・みる・ささえる～

駅伝大会の時期ですね！

駅伝は日本で発祥し、独自に発展してきたスポーツです。新年の風物詩となっている「箱根駅伝」や「全日本実業団対抗駅伝競走大会」ニューイヤー駅伝を家でゆっくり見ながらお正月を過ごす人もいるのではないのでしょうか。そんな日本人に愛される駅伝の魅力とはどういったものなのでしょう。

駅伝は、長距離を1人で走り切るマラソンとは違い、チーム一丸となってゴールをめざすチームスポーツです。それぞれのランナーが得意な走りを生かしてチームのために^{たすき}襷をつないでいく姿はまさにワンチームで、多くの名場面やエピソードを生み、感動を呼んでいます。

また、メンバーに選ばれなくても、メンバーのコンディション管理やケア、荷物番などチームのため

に自分のできることを全うする裏方のスタッフが、走り終えて倒れこむ選手を介抱している姿も印象的ですよね。

勝利に向けてそれぞれが自分の役割を全うした上で、チームとしての協調を大事にしていることが伝わり、そういったことが多くの人の心を掴むのだと感じます。沿道では毎年多くの人がランナーを応援し、まさに「する・みる・ささえる」が一体となったスポーツです。

伊賀市でも今年で65回目を迎える「伊賀地区駅伝競走大会」が1月26日(日)に開催されます。多くのチームが参加し、伊賀の地で熱い走りが繰り広げられます。テレビの向こうではない駅伝大会を体感してみませんか。みんなでランナーを応援して大会を盛り上げましょう！

【問い合わせ】 スポーツ振興課

☎ 22-9635 FAX 22-9694

✉ sports@city.iga.lg.jp



明日に向かって ～差別をなくしていくために～

パリオリンピック・パラリンピックを振り返って感じたこと ー総務部人事課ー

コロナ禍後2大会ぶりに観客が戻ったパリオリンピック・パラリンピックは大いに盛り上がりしました。今回のオリンピックで日本は、自国開催以外の大会では過去最多のメダル獲得数を記録し、パラリンピックでも前回大会を上回る数の金メダルを獲得しました。日本選手団の華々しい活躍は記憶に新しいところです。

ジェンダー平等を理念の一つとして、出場選手の男女の割合を50%ずつにするという目標を掲げていた今回のオリンピックでは、男女の出場選手数が初めて同数となり、歴史的な一歩を踏み出しました。パラリンピックでも、出場した女子選手は過去最多の約2,000人で、全体の45%でした。

女子選手がオリンピックに初めて参加したのは1900年の第2回パリ大会からで、このときは22人が参加し、男女の割合が等しくなるまで実

100年以上もかかったということです。

また、これまで女性しか出場できなかったアーティスティックスイミングのチームに男性が2人までエントリーできるという変更があったほか、これまで大会最終日に行われていた男子マラソンが、男女平等の精神を反映する目的で実施日が入れ替わり、女子マラソンがフィナーレを飾りました。

このように、ジェンダー平等の観点からさまざまな面でオリンピック・パラリンピックのあり方が変わりつつあることを感じました。

試合の勝敗やメダルの獲得数が話題になりがちですが、このように現代社会の変化が反映されている面に注目するとまた違った気づきがあるのではないのでしょうか。今回のオリンピック・パラリンピックを通して、あらためて日々の生活におけるジェンダー平等について考えるきっかけとなりました。

人権について考えるコラムです。

■ご意見などは人権政策課 ☎ 22-9683 FAX 22-9641 ✉ jinken-danjo@city.iga.lg.jp へ

伊賀市の文化財 156 市指定文化財（彫刻） 鷗宮神社の石灯籠

島ヶ原の鷗宮神社では、12月中旬に日本一遅い秋祭りと呼ばれる例大祭が行われます。秋祭りのメインとなるのが獅子舞です。島ヶ原地区の大道、奥村・中村・町・山菅・川南、中矢の集落から各一頭、計四頭の獅子が登場します。神社境内では、大広前、五段神楽、剣の舞、鼻高など獅子舞が奉納されます。

この鷗宮神社で目を引くのは、入口にある背丈をはるかに超える大きな石灯籠です。

この石灯籠は、高さ16尺（4.85m）、台石から宝珠までの総重量一四七〇貫（54,263kg）の非常に大きいものです。正面には「奉燈」、側面には「天下泰平」「日月清明」「国家安穩」を祈願する文言が刻まれており、背面の碑文からは石灯籠建立の由来を読み取ることが出来ます。

碑文には、田畑の境界が錯綜し、相続に難儀していたので8カ年の歳月をかけて調べ上げたことなどが記されています。そして天保14（1843）年9月に、無事検地を終えたことを氏神である鷗



文化財課
☎ 22・9678 FAX 22・9667

宮神社に感謝して石灯籠を建立しました。
江戸時代の伊賀国では、元禄年間（1688～1704年）を中心に検地が行われましたが、江戸時代後期に検地が行われたところもありました。一筆ごとの田んぼの面積を測り収穫量を計算する検地は、大変な労力を要する難事業でした。石灯籠の奉納は、検地の事業完了の意義の大きさを物語っています。
ところで、この石灯籠の特徴は、加工された石材を組み合わせる石灯籠と異なり、自然石をそのまま使ったように見せていることです。同じような石灯籠は、荒木の須知荒木神社前にもあります。
島ヶ原の秋祭りでは、獅子舞とともに、立派な石灯籠もご覧いただき、江戸時代の人びとの願いや労苦に思いを馳せてはいかがでしょうか。

IGAMONO
伊賀

IGAMONO
セレクション

No.56



伊賀牛

伊賀牛は古くは1310年の「国牛十図」に記されています。また伊賀忍者が牛の肉を乾燥させ保存食として携帯していたと伝えられ、この忍者の干し肉が伊賀牛のルーツともいわれています。当協議会では肉質がよいといわれる黒毛和種の雌の未経産牛に限定し、最終飼育地として寒暖差の大きい伊賀地域で最長12カ月以上当協議会が飼育したものを「伊賀牛」として定義しています。

流通にも特徴があり、その約8割以上が販売者（精肉店、家畜商）自らが農家の庭先で牛を評価して仕入れる全国でも珍しい生体取引です。また、ほとんどが地元で消費され、仕



入人が吟味した「伊賀牛」はどんな料理で味わっても絶品。柔らかな肉とキレの良い脂からあふれる旨味に思わず笑みがこぼれてしまう、なかなか他では味わえない地域限定の逸品です。

令和5年度で生産会員数25名 飼育頭数 約2,400頭



伊賀産肉牛生産振興協議会
副会長
北川 俊一さん

昭和28年5月1日、伊賀の精肉店が中心となり伊賀牛振興協議会を設立し、戦後初めて全国肉牛共進会に出品した牛は厚生大臣賞を受賞。組織的な「伊賀牛」の生産は昭和31年に始まり、伊賀全域へと波及的な広がりを見せました。昭和37年9月20日に

肉牛の生産振興を目的とし、伊賀市・名張市の生産者と関係機関が伊賀産肉牛生産振興協議会を発足。
60年以上の歴史ある協議会です。



【問い合わせ】 ☎ 059-233-5335
(JA全農みえ畜産課内)

■伊賀ブランド推進協議会事務局（商工労働課） ☎ 22-9669 FAX 22-9695